

高校生の学力問題

学力不足は、決して義務教育だけの問題ではありません。

先日（9月6日）道教委から「高校生の学力等実態調査」の結果が公表されました。この実態調査は、高校生について国語・数学・英語の基礎学力を測ろうとするもので、2005年から毎年実施されています。今年は、札幌市立高校を除く全ての公立高校と私立の1校が参加しています。

設問は、各教科について、高校1年生レベルの標準的なA問題と、発展的な内容のB問題で構成されており、学校が課題を選び2年生若しくは3年生に受けさせる方式です。

調査結果を見ると、国語のB問題を除き、いずれも期待正答率を下回っており、特に、標準的なA問題では、数学Ⅰの期待正答率52.3%に対し27.9%、英語Ⅰの期待正答率58.0%に対し31.7%と、大変厳しい結果となっています。

小・中学生を対象とした全国学力調査において、子ども達の学力不足が大きな問題となっていますが、小学校から中学校へ、更に高校へと、十分な理解が得られないまま心太式に押し出されていくという現状の中で、高校生の基礎学力の不足は深刻であるといわねばなりません。

こうした中、小中学校の学習で躓いたまま高校に進学した生徒を対象に、学び直しの授業に取り組み、成果を上げている高校が出てきています。学校の勉強について行けず疎外感を感じ、荒れていた子でも、勉強が分かるようになってくれば落ち着きを取り戻してくるということも聞きますので、各学校では、こうした学び直しの授業だけではなく、日々の授業においても、生徒の興味関心を惹きつけるような工夫改善に取り組んでいただくよう期待しています。

既に見てきたように、子ども達の学力不足の問題は小・中・高全体に及ぶ問題であり、取り分け、義務教育の段階で、如何に落ちこぼれを防ぎ、基礎学力

を身に付けさせるかが大きな課題となっています。このため、私は教育長時代、「コア・アビリティ」に取り組んでおりました。この取り組みは、基礎学力の定着を目指し、学習指導要領の内容で特に積み重ねの性質の強い内容を明確にし、その指導の徹底を図ろうとするもので、北海道教育研究所が研究・検討を重ね、その成果を報告としてまとめ公表しています。しかし、こうした基礎基本の定着に着目した教育実践に広がる気配が見えないことは、残念なことです。

子ども達の中には、勉強が好きで得意な子ばかりではありません。勉強が苦手な子、勉強の仕方が下手な子も沢山います。子ども達を同じように教育するとはいっても、それは、全ての子を同じように扱えば済むということでは、決してないはずで

す。教師の皆さんには、勉強の得意な子の力を更に伸ばしていくことは当然のことですが、同時に、勉強が苦手な子、躓いている子に対しても、基礎基本の根っこの所については落ちこぼれさせない、という意志と力が求められています。

（塾頭 吉田 洋一）